森を守り、育て、活用する

林業という仕事を知る

1年を通して森に入り、優良な木が育つように手入れをする。
健全な森を育む手助けをする、林業の仕事について詳しく紹介します。

木を切る仕事は林業の一部
実は幅広い沖縄の林業の仕事

林業の仕事というと、チェーンソーを片手に木を切り倒すイメージを思い浮かべる人は多いかもしれません。確かに、木の伐採も仕事の一つではありますが、林業の現場ではもっと多くの作業が行われています。

「植えて、育てて、伐って、活用する」というのが林業の基本的な作業サイクル。大切な資源としての森林を絶やさないことを一番の目的に、さらに世界的に見ても貴重な生き物の宝庫である自然環境を守ることも、林業の一つとして求められていることです。そのため、やんばるなどの国立公園に指定されているエリアでは、密猟を防ぐためのパトロールなどにも携わっています。

木を植えてから活用できる大きさまで育つには、数十年単位の時間が必要です。自分たちが植えた木を、育て、伐採して、活用するのは、次の世代になります。林業の一つひとつの作業はすべて、未来へつなぐバトンなのです。

― 沖縄の林業における4つの作業 ―

植 林 01

植えることは林業のキホン

伐採を行った場所をきれいにし、苗を一本一本手作業で植えていきます。植林する広さにもよりますが、通常、作業は6～7人で1週間程度かかります。植える苗木は、自分たちで樹木の種を拾い、発芽させて育てるところから行うこともあります。

02 下刈り

苗が育ちやすいよう雑草を刈る

植えた苗木に十分に栄養や光が行き渡り、育ちやすい環境にするために、周りの雑草を刈り取る作業。暖かく雨の多い沖縄では、雑草もその旺盛な生命力でどんどん生えてくるため頻繁に行います。必要な道具は刈払機。急な斜面の中、苗木を切らずに扱えるようになるには経験が必要。

除間伐 03

大きく育てる木を選び環境を整える

植栽された木のほかに、自然に生えて育った材として優良な木もあります。その中から、まっすぐで成長のよい木を見極め、その成長を妨げる木を伐っていきます。

04 伐 採

木材として活用できる木の収穫

十分な太さに育った木を切り倒します。安全に切るために、どの方向に倒すのか、そのためにはどの方向からチェーンソーの刃を入れるのかなどを事前に十分確認した上で行います。切り倒した後はある程度の長さの丸太に切り揃え、トラックで集材所まで運びます。

苗を植え木を育てる

沖縄の造林地

戦後に荒廃した森林を復活させるため
人々が苗を植え木を育てたおかげで
沖縄の森林は充実した時期を迎えています。

木材の収穫のためだけでなく景観美化の目的も

沖縄の総面積の中で森林が占める面積は約47％。民有林の天然林が約86％、残りの14％が人々の手によって植樹が行われた「造林地」です。

沖縄の森林は戦争を境に大幅に荒廃した時期がありました。ですが、戦後の復興でいち早く植林に取り組み、その後の継続的な努力と、適切な整備と管理を行ってきたことで、沖縄の森林は現在とても充実した状態を保っています。「造林未済地」と呼ばれる、伐採後に植林を行わないままの地域はほぼありません。

沖縄の造林地の特徴の一つに、造林地に複数の樹種を植えるという点があります。こうした造林地は県外ではあまりありません。木材を採るためだけでなく、防風や防潮のため、優れた景観を保つためなどさまざまな役割を担っていることから、沖縄では複数の樹種による造林が行われるようになりました。沖縄本島から石垣島まで、各地の充実した造林地を紹介します。

国頭村 …… リュウキュウマツ・イジュ造林地

県内最大の木材供給拠点、国頭村の造林地

平成５年度にリュウキュウマツを造林し、平成20年度にイジュを樹下植栽した造林地です。リュウキュウマツとイジュは相性が良いといわれています。国頭村は、本県の木材拠点として、県産木材の供給地として重要な役割を担っています。また、国頭村内には３つのダムと河川から取水する７つのポンプ場があり、県内各地へ多くの水を供給しており、森林の有する水源涵養機能を維持･増進するためにも適切な森林管理が求められています。【樹種：リュウキュウマツ／イジュ】

今帰仁村 …… クスノキ造林地

木材生産や森林の公益的機能増進のため造林

昭和62年度にクスノキを造林した箇所です。平成17年度と平成29年度に除間伐が行われています。国頭村を除く本島北部地域は、木材の生産や森林の有する公益的機能の維持増進を図るため、クスノキやセンダン、イスノキ等が造林されてきました。
【樹種：クスノキ】

北中城村

ふれあいの森

景観保全と緑化を目的に多くの樹種を造林

平成19年度にアカギやサクラ、タブノキなどを造林し、現在では「ふれあいの森」として、村民が花を見たり昆虫と触れ合えるよう管理されている場所です。本島中南部では、戦後荒廃した森林の回復を目指すため、緑化を目的にリュウキュウコクタンやデイゴなどが造林されてきました。ススキやギンネム等が優先する低質林について、高木性の樹木を植栽することにより、森林の公益的機能の維持増進や景観保全を進めていくことが重要です。【樹種：アカギ／サクラ／タブノキ／リュウキュウコクタン／デイゴ】

宮古島市

アカギ・フクギ造林地

防災に強い島づくりに一役買う造林地

平成7年度にアカギを、令和2年度にフクギを樹下植栽した場所です。宮古地域の森林面積は復帰後の20年間で半減し、森林の公益的機能が低下したことから、活発な森林整備が行われています。また、島全体がおおむね平坦であり、平成15年9月に来襲した台風14号により農地やライフラインに甚大な被害が発生したことから、植林による防災に強い島づくりの必要性が再認識されました。宮古地域は、キオビエダシャクやアカギヒメヨコバイ等の森林病害虫の被害が確認されていない地域でもあります。【樹種：アカギ、フクギ】

石垣市

リュウキュウマツ造林地

真っ直ぐで優れた木材の収穫に期待

昭和35年度にリュウキュウマツを造林した箇所です。八重山地域は松くい虫の被害が確認されていないほか、通直な個体も多く、優良な林分が多く存在しています。島内のリュウキュウマツ林は収穫期に達していることから、今後の重要な供給地として期待されています。

【樹種：リュウキュウマツ】

コラム

森林・林業関連の研究機関

沖縄県森林資源研究センター

名護市名護に、亜熱帯森林の持続的な利用を多面的に研究している沖縄県森林資源研究センターがあります。ここでは、森林・林業に関する様々な研究が行われています。本研究センターもぜひご利用ください。（連絡先：☎0980-52-2091）

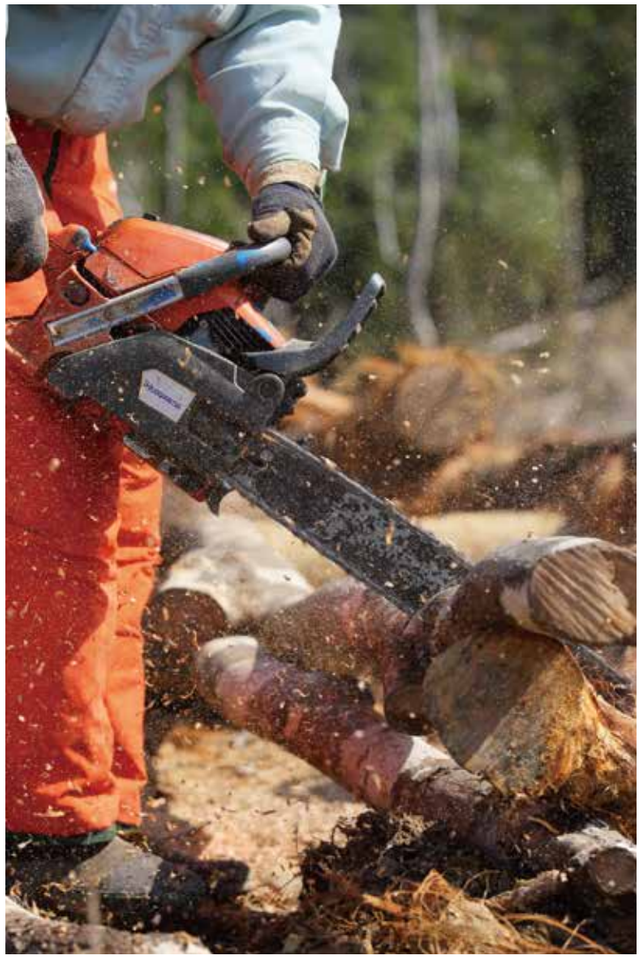
主な研究内容

- 森林の公益的機能の高度発揮に関すること
- 樹木の育種、育苗及び育林に関すること
- 森林立地に関すること
- 木材に関すること
- きのこ等の特用林産物に関すること
- 樹木に係る病害虫等防除に関すること
- スマート林業の推進に関すること

庁舎

育苗施設（ガラス室）

きのこ発生舎（菌床しいたけ）



自然を有効活用
収穫伐採

**収穫期を迎えた森林から
木材を収穫する「伐採」作業。
その先には新たな森林の
誕生が計画されています。**

いろいろな樹種を育て
循環利用をふまえた伐採

これまでの計画的な森林整備により、現在最も充実し収穫期を迎えている沖縄の森林。昔から建築材や民具、燃料など、さまざまな目的や場面で木材は使われてきました。現在は、それぞれの樹種の特性に合わせた利用ができるよう、いろいろな種類の樹木を育て、資源の循環利用をふまえた収穫伐採を行っています。

毎年、伐採作業を行う前には、作業員を含めたメンバーで希少動物などの保護や保全に配慮するため、地域の環境に関する勉強会を行います。そして実際の伐採を行う際は、まずは安全第一。伐採に適した装備はもちろん、指差しや声に出しての確認をし、切る作業へと移ります。切った際に倒れる方向の確認や、切った後に運びやすく切り分ける「玉切り」という作業などのために、通常は4〜5人でチームを組んで伐採作業に当たります。

伐採後、収穫した木材を有効活用するのはもちろん、伐採した土地に苗を植え、新たな造林地として育てることも林業の大切な仕事。森林の循環利用を行っています。

伐採の方法

危険を伴う可能性がある伐採作業は安全に配慮することが何よりも大切。
最終的に運搬することも考え、基本に忠実に効率良く作業を進めます。

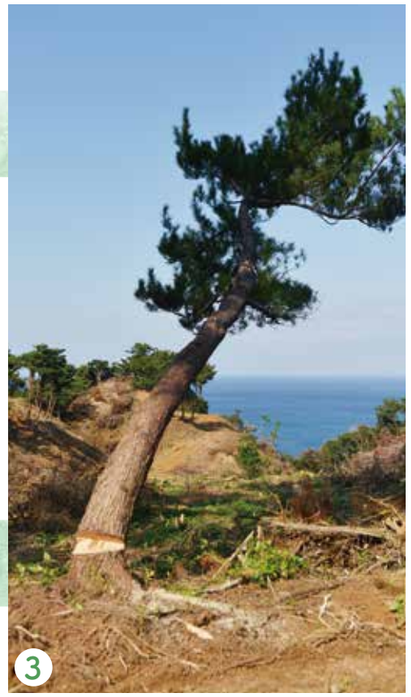
START ▶

1 方向確認

まずは切り倒す方向を確認。土地の傾き、木が伸びている方向を見て、どちらに倒すかを決めます。

2 受け口を作る

狙った方向に確実に倒すために、倒れる方向に「受け口」と呼ばれる切り込みを入れます。



3 伐 倒

受け口の反対側から切り込み（追い口）を入れます。ある程度の深さまで切り込みが入ると樹木が自然と倒れます。

4 玉切り

切り倒した樹木は運びやすいようにその場で一定の大きさに切る「玉切り」を行います。

5 集 材

雨や風で傷まないよう、伐倒や玉切りの後は木材を迅速に加工場へと運びます。

6 運 搬

整備された林道を通り木材加工場へと運ばれ、適切に製材、乾燥し木材として販売されます。

MEMO 路網整備とは？

林道及び作業道等の路網は、木材搬出や適切な森林管理のための重要な施設として役割を果たしているほか、山村地域の活動や災害時の避難路・迂回路として、また近年は都市住民の森林レクリエーション活動にも利用されるなど、県民生活にも貢献しています。

コラム

環境調査に係る研修会

希少野生動植物が多く生息・生育しているやんばる地域では、環境に配慮した森林施業が求められていますが、そのためには希少野生動植物のことをよく知らなければなりません。

このため、県や市町村の林務関係職員、林業従事者は、令和元年度から希少野生動植物についての研修会を行っています。

伐採後の植林と成長

沖縄県は亜熱帯海洋性気候に属し、暖流の黒潮と季節風の影響で年間降水量が多く、亜熱帯性の多雨林が発達しています。沖縄県内の収穫伐採跡地は、切り株から出てくる芽の成長、伐採前から生えていた稚樹の生育、伐採前から地表に光が当たるのを土の中で待っていた種子の発芽、伐採後に飛んできた種子の発芽などがあり、高い再生能力を持っています。

沖縄県の林業では、用材としての利用が期待される有用樹を植栽しますが、このように天然更新した樹木の一部を残存させる等の施業を行い、人工林であるにもかかわらず、種の多様性が高く、多くの野生動植物が生息･生育できる持続可能な森林の管理に努めています。

伐根からの萌芽や草がまばらな状態

樹木を切り倒し、運搬などの作業を行った直後の状態。ここへ新たな苗木を植え、造林地として適切な管理を行い育てていきます。

地面が緑で覆われ幼木が育つ

植林後は、旺盛な生命力で生茂る雑草を刈る「下刈り」を定期的に行います。これにより、植栽木に太陽の光を届きやすくし、育ちやすい環境を作ります。

育てる木を選別し成長を促す

ある程度の高さまで成長した木は下刈りをするとともに、曲がっていたり二股に分かれた木を伐採する「除間伐」という作業を行い、大きく育てる木の成長を促します。

周辺と差のない森林へ成長

見上げるほどの高さに育ち、充実した森林へと成長しました。木材として収穫するまでにはまだ長い時間がかかりますが、それまで適切な管理を続けます。

風、潮、崩れ、虫などを防ぐ

人々の生活を守る森林

普段、何気なく目にしている森林は、実は暮らしを守るさまざまな役割を担っています。防風や防潮、山地災害を防ぎ、また、その森林を病害虫被害から守る作業も行っています。

保安林

水源の涵養、災害の防備等の公共目的を達成するため、特にこれらの機能を発揮する必要がある森林を保安林として指定しています。保安林内における樹木の伐採や土地の形質変更等の行為が制限されています。樹木の伐採にあたっては、保安林ごとに「伐採方法（伐採種を定めない、択伐、禁伐）」や「伐採面積の限度」が指定されています（指定施業要件）。

水源涵養保安林（大宜味村字大保）

潮害防備保安林（南城市知念）

保安林の指定の解除について

保安林は制度の趣旨から森林以外への転用をするべきではなく、保安林の指定の解除については、

❶ 指定の理由が消滅したとき　❷ 公益上の理由により必要が生じたとき

に限られています。このため、解除の必要が生じた場合は、所管する沖縄県の出先機関に早めに確認を取る必要があります。

保安林内における伐採、作業行為に係る許可又は基準

保安林の適切な保全を図るため、以下の行為を行う場合には沖縄県知事への許可申請や届出が必要となります。

治山事業

治山事業は、森林の造成を通じて山地災害や潮風害から県民の生命、財産を保全し、また、水源の涵養や生活環境の保全、形成を図ることを目的に、原則として、保安林または保安林の指定手続きが確実に行える森林で行われる事業です。

事例1

災害関連緊急治山事業 復旧治山事業

（大宜味村根路銘）

事例2

緊急予防治山事業

（南城市志喜屋）

事例3

海岸防災林造成事業

（伊是名村勢理客）

病害虫の防除

沖縄県の主な森林病害虫として、松くい虫やキオビエダシャク、デイゴヒメコバチなどの侵入病害虫がいます。本県では、森林地域の防除については主に森林管理課が、緑地の防除については主に環境再生課が取り組んでいます。

松くい虫の被害により赤枯れしたリュウキュウマツ

松くい虫

マツノザイセンチュウという線虫がマツノマダラカミキリによって運ばれ、リュウキュウマツを枯らします。

マツノマダラカミキリ

マツノザイセンチュウ

葉がないのはキオビエダシャクの食害にあったイヌマキ

キオビエダシャク

突発的に大発生し、イヌマキやナギの葉を食害します。１年の間に数回発生すると、イヌマキは枯死します。

キオビエダシャクの幼虫

デイゴの葉にできた虫こぶ

デイゴヒメコバチ

デイゴの葉や葉柄等に虫こぶを形成し、樹勢を弱らせます。

デイゴヒメコバチ

アカギヒメヨコバイの吸汁によって褐変したアカギの葉

アカギヒメヨコバイ

アカギの葉を食害し、葉の褐変、落葉を引き起こします。

アカギヒメヨコバイの幼虫（左）と成虫（右）

松くい虫の主な防除手法

薬剤の地上散布

４月～５月にかけて松の若枝を食害するマツノマダラカミキリを殺虫するため薬剤を散布します。

伐倒駆除（焼却処分）

松くい虫の被害木を焼却し、材内のマツノマダラカミキリの幼虫を殺虫します。

伐倒駆除（燻蒸処分）

松くい虫の被害木を薬剤により燻蒸し、材内のマツノマダラカミキリの幼虫を殺虫します。

森の仕事人インタビュー

林業ってどんな仕事なんだろう。
その面白さや魅力について聞きました。

01 国頭村森林組合／知花 蓮
REN CHIBANA

初めて入る山でどんな木が生えているのかいつも楽しみ

「今は仕事、好きですよ。やり始めた時は続けられるかなと思っていたけど（笑）、今は全然思わないですね。初めての山に入る時はやっぱり嬉しい」。

知花蓮さんは林業に就いて約5年目。父や祖父が林業に携わっていたこともあり、自然な流れでこの仕事をやるようになったそう。沖縄の中でもっとも林業が盛んな国頭村で生まれ育ち、高校生の時にはアルバイトで手伝ったことも。山はずっと身近なものだったけれど、仕事としての山の面白さを知ったのはこの数年のことだといいます。

「これまでいろんな現場に行ったけど、知らない山に入るときはいつも楽しいですね。どんな木があるのか気になるし。植林でも除伐でも、木の名前を覚えないと、どれを切っていいのか分からないので、教えてもらったり勉強していたら、だんだん分かるようになりました。花が咲く木が面白いと思うし、好きですね」。

家では植林用の苗木を自分でも育てるなど、森林やそこで育つ樹木に興味を持つようになったという知花さん。険しい斜面や手間のかかる現場も、知花さんは刈払機やチェーンソーを片手に着実に整備を進めていきます。

PROFILE
知花 蓮（ちばな れん）
県外で鳶の仕事を経験した後、22歳で林業に従事。父、祖父ともに林業従事者。趣味は花木の盆栽。国頭村辺土名出身、2児の父。

安全に伐採をするためには準備が何よりも大切

山へ入る仕事は、大体いつも朝8時過ぎに現場近くの集合場所に集まり、チェーンソーの刃研ぎから始まります。

「林業はとにかく刃研ぎが基本だと思います。刃が切れないと木が思うような方向に倒せないから危ないし、自分が研いだ刃で、狙い通りに倒せるのは一番嬉しい」。林業に就いて3年目になる安谷屋力也さんはそう話します。細かく並んだ刃の1本1本にヤスリをかけるのは骨の折れる作業。でもその重要性が分かるから、手を抜くことはありません。安谷屋さんは少し前に、太さ95センチのリュウキュウマツを切ったと、動画を見せてくれました。

「こんなに太いのを切るのは初めてで、一歩間違えたら大事故になるから緊張したし、不安もあったけど、先輩方がアドバイスもくれたのでうまくいきました。これを自分で切った、というのは興奮しますよね」。

伐採は好きだけど、林業は体力が必要で手間がかかると、安谷屋さんは言います。でもこの仕事をしていなければ森がこんなにあることも、こんなに多くの木があることも知らなかった、と。安谷屋さんはいま、林業の大変さと面白さの両方を感じているようです。

PROFILE
安谷屋 力也（あだにや りきや）
19歳から林業に従事。祖父、父、いとこも林業従事者で最近は義父も誘い同じ現場に入る。休日は妻、2人の子どもと家族で過ごす。

02 沖縄北部森林組合／安谷屋 力也
RIKIYA ADANIYA

03

八重山森林組合／宮村 祥平

SHOHEI MIYAMURA

長いスパンで木々と関わることが林業の面白さ

農林水産の仕事の中でも、林業は収穫するまでの期間が他のものに比べてけた違いに長いのが特徴。その点が面白いと、宮村祥平さんは林業の仕事に興味を持ったと言います。

「もともと親が農業をやっていたのもあって、ある時から生産者になりたいと思うようになりました。例えば農業で、パインの生産だとしても、長くて2年くらい。でも林業はどんなに早くても40年という長さ。そこに面白さがあると思うし、先輩たちが植えて育ててきてくれたものを収穫できるという嬉しさもありますね」。

よく一緒に現場に入るという仕事仲間の平山英次さんも林業ならではの成長サイクルに、「自分たちで以前植えた現場を見て回ったときに、ぐんと成長しているのを見ると植えてよかったと思いますね。林業は植えないと始まらないし、その成長を見続けられるのは楽しみですね」と。昔から林業が盛んだった石垣島では、いま石垣ならではの循環型林業の確立を模索しているところとのこと。景観や人々への癒しを提供する場としての森林と、材を取り活用するための森林。石垣での林業を担う二人に、期待がかかります。

PROFILE

宮村 祥平（みやむら しょうへい）

石垣島生まれ。県外でいくつかの仕事を経て林業に従事。趣味は、最近始めたにも関わらず石垣で本因坊を獲得した囲碁と、山歩き。

森林の仕事を始めて2年。技術も知識も深めていきたい

「林業をやっているって友達に話すと、『宮古に林業ってあるの？』と言われるのと、自分も始めた当初は山のない宮古島になんで森林組合があるんだろうって思っていましたね」。

平良優紀さんは2年前、知人の紹介から宮古森林組合に所属し働き始めました。高校時代は野球部に所属し、体力には自信があったという平良さんですが、林業の仕事を始めて、森の中での機械を使った作業は、運動で体力を使うこととはだいぶ違うと実感したとのこと。最初は体力のコントロールの仕方がよく分からず、足がつったりバテてしまうことも。先輩の様子を見習い、体力を維持しながら作業することがようやくわかってきたそうです。

「宮古は、いま森林を育てている段階だと聞いています。だから作業も植林と下刈りがほとんど。刈払機の操作もようやく慣れて、今では次の作業がしやすいように考えながら刈ることができるようになりました。もっといろんな技術を学びたいです」。

平良さんはこれから、全国森林組合連合会が運営する「緑の雇用」制度を利用し技術を学ぶ予定とのこと。スキルアップを目指します。

PROFILE

平良 優紀（たいら まさき）

宮古島出身、23歳。沖縄本島の専門学校卒業後、事務や営業の仕事を経験し、林業に転職。休日は友人とゴルフや釣りを楽しむ。

04

宮古森林組合／平良 優紀

MASAKI TAIRA

05

沖縄県森林組合連合会／金井 直樹

NAOKI KANAI

仕事の段取りを大切に、木育体験の場も広げていく

県内の森林組合のとりまとめ団体である沖縄県森林組合連合会は、本島中南部および近隣離島の森林整備や、各組合が必要とする資材等の販売が主な仕事です。以前はサービス業等の仕事をしていた金井直樹さんが、連合会に入社したのは2009年。連合会という立場的に各組合とのやり取りや連携を取ることも多いとのこと。

「細かな仕事が多いので、とにかく段取りが大事ですね。朝は早めに来てまず1日のスケジュールを組み立てます。そうしないと仕事が回らなくて」。金井さんの現在の仕事は、事務所内での作業と現場の作業がほぼ半分半分。現場仕事では造林地や離島の保安林の手入れを行います。

「林業は正直大変な仕事だと思います。でもその中でも除伐や剪定は好きですね。きれいになったのが見てすぐに分かるじゃないですか」と金井さん。今後、仕事で力を入れたいと思うことは木育体験とのこと。

「以前やったときもそうでしたが皆さんいろいろなものを作るので、見ていてとても楽しい。木育体験をきっかけに、沖縄の木に興味を持ってもらえたらいいなと思います」。

PROFILE

金井 直樹（かない なおき）

農業大学校卒業。転職時に林業を選択。連合会では緑の雇用の手配なども行う。那覇市出身。休日は森で子どもたちと昆虫採集。

森の仕事 Q&A

林業に携わるみなさんから
実際の仕事についての質問に
答えていただきました。

Q1 林業の仕事をする上で一番大切なことは？

怪我をしないようにすること。それが林業で一番大事なことです。林業はチェーンソーや刈払機などを使いますが、どれもよく切れるけど手入れをきちんとしないと思うように切れなくて危ない。慣れないことで操作が危ないこともあるけれど、慣れても気持ちのゆるみで危ないこともある。どちらにしても安全を第一に作業することが大切だと思います。

国頭村森林組合
知花 蓮さん

Q2 緑の雇用って何ですか？

林業のいろんな技術が学べる制度です。1年目は林業の基本的な作業として、刈払機やチェーンソーの扱い方、玉掛けの技能講習などがあり、2年目はその応用と安全講習。最終年の3年目には、基礎的な技術に加えて大型機械を使った作業が学べます。座学で約1ヶ月、実地のOJTで約8ヶ月かけて教わります。未経験者でも林業の仕事ができるように作られた制度です。

宮古森林組合　平良 優紀さん

Q3 林業の仕事はどんな仕組み？

苗木を育てて、植えて育てて、切って活用する、というのが一つのサイクルですが、こうした作業は国や県、市町村から組合が委託を受けて行っています。それ以外に木材や苗木を販売したり、個人からの依頼を受け収益につなげることもあります。その仕組み作りはこれからの課題だと感じています。

八重山森林組合
宮村 祥平さん

Q4 よく使う道具はどんなものがありますか？

主に使うのはチェーンソー、刈払機、剪定鋏、手ノコなどです。伐採や除伐で太めの樹木や枝を切る時にはチェーンソー、下刈では刈払機を多く使います。チェーンソーは枝を払うときに使うこともありますが、細めの枝や木の幹に絡まるつる性の雑草などは剪定鋏でも十分に切れるし、手軽で作業がしやすいのでよく使いますね。

沖縄県森林組合連合会
金井 直樹さん

Q5 林業の仕事で人の役に立っていると思うことは？

自分の次の世代の人たちに木を残せること。自分で植えた木で材を取ることはできないけど、それが次の世代の人の役に立つならいいなと思って作業しています。いま材を取れているのも前の人が植えてくれたおかげですし。その他にも、街路樹の剪定で地域の人に「ありがとう」って言われると、役に立てているのかなと思えますね。

沖縄北部森林組合　安谷屋 力也さん

木材を活用する人インタビュー

木々と共に暮らす

沖縄の森で育った樹木を身近に感じて欲しい。
日々の暮らしの中で木材を使う人たちにその魅力を聞きました。

01

国頭村立 奥間小学校

**子どもたちが
木の温もりを感じながら
学校生活を送れるように**

触り心地がすべすべとしていて、持ち上げてみると驚くほど軽い学童机。国頭村内の小学校では、やんばる産の木材でできた学童机が使われています。

県産材の良さや活用することの大切さを伝えたいと、2003年にやんばる材生産振興普及協議会が立ち上がり、地元の材で学童机を作る取り組みがスタート。当時、協議会メンバーだった渡口直樹さんは「学童机を作るには、一定の量が確保できることと、子どもたちが使いやすい軽さが必要だったので、使う樹種は検討を重ねました」と。最初はイタジイやリュウキュウマツが候補に挙がったものの重さがネックに。そこで選ばれたのが、強度もあり、とても軽い材のウラジロエノキでした。

奥間小学校5年生の児童たちからは「軽くて運びやすいし、高さが簡単に変えられるんだよ」「引き出しが開けやすい」「卒業しても家で使いたい」など、愛着を持って使っている意見が聞かれたほか、保護者からは木の机と椅子になったことで落ち着きが出たという声も。温もりあるやんばるの木とともに、子どもたちは成長していきます。

02

NA-BA 生産企業組合

**木材から生まれるおが粉と
小麦のふすまで
きのこを生産**

INFORMATION
沖縄県名護市字旭川1692
☎0980-52-0238

きのこが育つのに木材が使われていることを知る人は意外と少ないかもしれません。木材を細かく砕いた「おが粉」と、小麦の表皮である「ふすま」を材料に、きのこの菌床は育っていきます。

「昔は、丸太にしいたけの種菌を植え付ける原木栽培が多かったけど、今は菌床ブロックが主流ですね。しいたけは種菌を植え付けて3ヶ月ちょっとで収穫できます。成長が早いんですよね」。そう話すのは2011年から名護市でしいたけとキクラゲの生産を始めたNA-BA生産企業組合の上原学さん。棚にはしいたけの菌床ブロックがずらりと並び、次々と収穫されていきます。

おが粉はもともと牛や豚の畜舎の敷料として森林組合が作っていたものを、きのこの栽培用に依頼したとのこと。おが粉には沖縄のさまざまな樹種が混ざっています。

「きのこの菌はおが粉とふすまを食べて大きくなります。栄養分としているのはこの二つだけ。だから、きのこを食べることは、人間も木の栄養分をもらっているということなんですよね」。

きのこを食べることで、もっと森の恵みを身近に感じられそうです。

03
トマイ木工

木工を始めてもうすぐ70年
木を使うために山を知る
その探究心は、変わらない

INFORMATION
沖縄県石垣市石垣677-1
☎0980-82-4362

トマイ木工の戸眞伊擴さんは2021年で80歳。それでも、木の魅力を夢中で語る姿や、ひとたび工具を手にしたときの技術の正確さと作るものへの真摯な姿勢からは、その年齢はとても感じられません。
戸眞伊さんは中学校卒業と同時に石垣の木工所で働き始めましたが、当時の八重山は林業が盛んで、木工所は35軒ほどもあったそう。製材したものは本島や別の離島へ出荷したり、製紙用にと本土へ送ることもあったと言います。
木を加工する立場ではあるものの、戸眞伊さんは自ら山にも入り、どの山にどの木があるかおおよそ把握しているとのこと。樹木へ並々ならぬ興味を持ち続け、分かる樹種は約115種類。使ったことのある材は70種類を超えるそう。それぞれの木肌の特徴や堅さ、香りなど、木にまつわる知識はすべて記憶に刻まれています。若い人たちが戸眞伊さんに学びたいと、訪ねてくることも少なくありません。
「材料としてこんなに表情豊かなものは他にないよね」。楽しそうにそう話す戸眞伊さん。その知識は沖縄の林業にとっても重要なもの。残していくべきものなのです。

主な作品

丁寧な作業の積み重ねが見える戸眞伊さんの作品。釘を使わず木を組んで作る重箱や、変わった樹形をそのまま生かした菓子箱。光を通すほど薄く加工したランプシェードは真似のできない技術。依頼され作った機織り機は使いやすさをとことん追求し研究と改良を重ねて完成した努力の賜物。

04
洋屋

惹かれたのは
沖縄だから生まれる
リュウキュウマツの木目

INFORMATION
沖縄県国頭村鏡地65
☎0980-43-0209

「木で何かを作るのは、すごく面白い。同じリュウキュウマツでも育ち方や環境によって堅さも木目の出方も違うし独特だと思う。節があったり個性のある木が多いけど、僕にとってはその方が面白いね」。
国頭村で工房を構える野田洋さんは、5年ほど前、静岡県から妻の故郷である沖縄へと移住し、木工の仕事を始めました。さまざまな種類の木がある沖縄で、野田さんが特に気に入って使いたいと思ったのがリュウキュウマツ。作るもののほとんどに使っているといいます。
「リュウキュウマツっていう名前から沖縄らしさが感じられるのもいいし、冬でも暖かいから日本の北の地域とはまた違う木目が生まれる。きれいだなと思って」と野田さん。温暖な気候で育まれ、はっきりとした木目を刻むリュウキュウマツ。そこに惚れ込んだ野田さんが作る、木目を生かしたお椀には、見る人の目を奪う美しさがあります。
「これからは自分の技術をもっと磨いて、多くの人に見てもらえる機会を増やしていきたい」と野田さん。その作品は見る人に、木本来の美しさを気づかせてくれます。

主な作品

お椀やお皿、メモ帳など、普段使いのものを作ることが多い野田さん。なめらかな触り心地が気持ちよく、木特有の癒しが感じられます。ドーナツ型のものは晩酌用の器。真ん中の穴にはビール缶がすっぽり収まり、まわりにおつまみを並べて使用。野田さんの遊び心が感じられる作品。